

佐藤成広作 「文化祭」

効果音 (文化祭開催高のガヤ)

浅田敬子 ねえ良夫、3年C組のやってるゲームセンター行くわよ。

田島良夫 おい、待てよ。おれの意志は無視するのかよ。基本的人権の侵害じゃないか。

敬子 つべこべ言わないで付いてきなさいよ。ゲームセンターはサッコに「来てくれ」って言われてんだから。

良夫 わ、分かったよ。そんなに引っ張らなくてもいいだろう。服が破けちゃうじゃないか！ 放してくれよ。見っともないよ。

敬子 始めっからそうしておとなしく付いてきてくれりゃあよかったのよ。2階の一番奥よ。ブスリ実験室のすぐ手前の教室。

良夫ナレーション おれは田島良夫。18歳。恐怖の灰色受験生。今日は幼なじみの浅田敬子の学校の文化祭だ。敬子が「ぜひ来てくれ」って言うから来てやったのに、今日は朝から敬子に振り回されっ放し。高校生活最後の文化祭なんだから、まあ仕方ないとも言えるけど…。

敬子 さあ、着いたわよ。ここでチェスうやろう。

良夫 おれに負けるの分かってるくせにやるのかい？ 中学のころから一度も勝ったことないじゃないか。

敬子 中学のころからはすっごく進歩したんだから。1,300円も出してチェスの本買って勉強したし。

良夫 そのお陰で学校の勉強の方はさっぱり。

敬子 そんなことどうでもいいでしょう。さあ、やりましょう。わたし白番でいいでしょう？

音楽 (ゲーム進行形を表す軽い感じ)

敬子 あ、ちょっと待って。

良夫 またかい。これからはもう待ったなしだよ。

敬子 分かったわ。せっかくチェスの本買ってきても、数学の参考書と同じで、読まなきゃダメね。

良夫 当たり前だ。だけど、数学の教科書と同じなら、読んでも分かんないだろうね。

敬子 言ったわね。ナイトをここへ動かして、チェックよ。チェスの本読む暇なかったのよ。

良夫 数学の参考書でも読んでたのかい？ このチェックはポーンで防げる…と。まさかね。

敬子 文化祭の準備がものすごく忙しかったのよ。みんな責任をわたしに押し付けてくるんだもん。

良夫 敬子のクラスは何をやってるの？

敬子 映画を作ったの。

良夫 へえー、すごいもんだね。それいつやるの？ ぜひ見たいな。

敬子 それが決局間に合わなくてさ。未完成のまま本番でわけ。だってさ、“今の受験体制を真剣に見つめた映画を作ろう”ってみんなで決めたのに、「おれはドタバタ喜劇を作りたかったんだ」って言って手も貸そうとしなかったり、「わたしには関係ないわ」って感じで、映画作りの話し合いの最中に単語暗記してたり…。あんじゃあだれでも頭に来るわよ。それに、最初のうちは手伝ってくれてても、効果音とかを入れるようなところになったら、やめてっちゃうし。結局最後まで残ってこの映画作ってくれたのは5人しかいなかった。クラスみんなで48人も

いて、そのうちたったの5人よ！

良夫

それじゃあみんなで作ったことにならないじゃないか。

敬子

そうなのよ。だけど、一番頭に来たのは和彦君よ。

良夫

和彦って、あの中3の時、同じクラスだった、背の高い…。

敬子

そう。彼らも始めは映画作りに協力してくれてたのよ。だけど…。

音楽

(回想のブリッジ)

敬子

えーと、それじゃあ合格発表のシーン行きます。みんな、複雑そうな表情をして…。はい行きます。カッチン！

沢田和彦

えーと6342番、あるかなあ。1364、1367…、この辺じゃない。6250、6251… あ、この辺だ。おれの周りも結構受かってるじゃん。6273、6326、6379、63…。

敬子

カット！

和彦

なんてカットなんだよ。せっかくこれからってとこなのに。

敬子

表情がなってないのよ。自分の番号がなかったって気づいた瞬間の表情に、もっと深刻なものが欲しいな。

和彦

うるせえな。実際に入試に落ちてみろよ。そんな深刻な顔つくってる余裕なんかねえんだよ。

敬子

でも、これは映画なのよ。作られた虚像なのよ。訴えるものがなくては意味がないのよ。わたしはその表情で受験体制に対する批判を…。

和彦

(かぶせて)演技するのはこのおれなんだぜ。おれを抜きにして、無視して忘れて こき使って映画を作ろうたって、そうはいかねえよ。おれにはおれの主義がある。

敬子

分かったわよ。でも監督はこのわたしよ。監督の言うことは聞いてほしいわ。文化祭まであと1週間しかないんだから、みんな頑張りましょう。それじゃあもう一度合格発表のシーン行きます。

効果音

(カチンコ)

和彦(モノローグ)

えーと6342番あるかなあ。6250、6251… 6379。な、ない！ おれの番号がない。あれだけ一生懸命勉強してきたのに！ 一体今までの勉強が何になったんだ。おれの人生の中で、あの受験勉強は全く無駄だったんだ！ えーい、ヤケだ。こんな合格発表なんか、破いてやる！

効果音

(合格発表用紙を破く音)

敬子

カット、カット！ いったいなんてことしてくれるのよ。だれが「合格発表の紙を破け」なんて言ったのよ。その番号を書いた紙を作るだけで一日つぶれちゃうのよ。あんたどういうつもりなの?!

和彦

さあね。おれのやりたいようにやったまでさ。それじゃあ、おれはここで失礼するぜ。せいぜい映画頑張ってくれよな。陰ながら応援してるぜ、「主役のいない映画の作り方」っていうドラマにな。

敬子

待ってよ。あんた、責任逃れしようっての？ そんなのひどいわよ。意気地ナシ、ウスノロ、間抜け、バカヤロー！ もうあんたなんかに頼まないから、勝手にどこへでも行っちゃまえ！（泣き出す）

音楽

(ブリッジ 回想終わり)

敬子

そういうわけで、和彦君はその日以来、撮影から抜けてしまったの。代役を立てたけど、結局文化祭までには間に合わなかったってわけ。ほんとに頭に来るわ、和彦君には。

良夫 まあまあそう怒るなよ。シワが増えるぞ。

敬子 わたしはオバンじゃありません。余計なお世話です。でも、もしシワが増えても、それは和彦君の責任ですからね。なんとかしてもらおうわ。

良夫 すごい剣幕だな。おれに怒ったってしょうがないんだぜ。さっきから敬子の話を聞いてると、和彦一人が悪者みたいだな。

敬子 そんなの当たり前じゃない。彼がわたしの言うこと聞かないのが悪いのよ。

良夫 でも本当にあいつだけが悪いのかな。確かに一彦は敬子の思うとおりに動かなかったかもしれないけど、そのことで和彦とじっくり話し合ってみたかい？

敬子 あの日以来、和彦君とは絶交よ。毛杏奈人の顔、二度と見るのもイヤだわ。

良夫 お互いにそんなこと言ってるうちは、まだまだ子供だな。デパートのオモチャ売り場の前で、親に向かって泣きわめいている子供と同じだよ。オモチャ売り場の子供たちだって、自分の思い通りにならないから駄々をこねるんだぜ。その子供たちと敬子とどこが違うって言うんだい？

敬子 それはそうかもしれないけど、和彦君が非を認めて謝らない限り、わたしは絶対許さないわよ。

良夫 そして敬子も非を認めて謝るんだな。

敬子 え？ わたしが謝る？

良夫 そう。敬子も和彦に向かって謝るんだよ。和彦も間違っていたかもしれない。だけど敬子も間違っていたんだ。それは、お互いが相手を自分と同じ人間だって思ってたからなんじゃないかな。心のどこかで相手が自分より才能がないとか、自分が監督なんだから上なんだと言ってさげすんでいたんじゃないかな。お互いが相手を尊敬する気持ちを持っていれば、決してそんなケンカ別れをしなかったと思うよ。

敬子 そう… 言われりゃそうかもしれないけどさあ。だけど、彼がもう少しわたしの立場を分かってくれたら…。

良夫 それぞれ。世の中にはいろいろな争いがあるけど、それらはみんな、自分の利益ばかりを求め、相手の立場を無視したことから怒ってきてるんじゃないかな。敬子も、一彦の主演としての立場をもっと尊重すべきじゃなかったのかな。あいつも主演をもらって、一生懸命祖の役をこなそうと努力してたんだよ。そんな時に敬子にガミガミ言われたもんだからさ。頭に来ちゃったんじゃないかな。

敬子 うーん、そうかあ。確かに良夫君の言うことにも一理あるわね。“自分の利益を求めずに、相手を尊重する。”——言ってることはカッコいいけど、なかなかできることじゃないもんね。だけど良夫君、痛いところ突くわね。なんだか先生みたい。あんたがそんなふうに見えるなんて、思ってもみなかったわ。

良夫 見損なっちゃ困るよ！ …とか何とか言って、へへ、実はね。行ってる教会の今週の礼拝でさ、牧師の説教がちょうどこんな話だったんだよ。おれ、敬子のこと考えて、フンフンって聞いてたわけ。中心になる聖書の言葉がね、「何事でも自己中心や虚栄からすることなく、へりくだって、互いに人を自分よりもすぐれた者と思いなさい。」(ピリピ人への手紙 2:3)っていうんだ。

敬子 ふーん。ねえ良夫君。今度の日曜、教会連れてってよ。

<完>